

## 第3章 流域の社会状況

### 3-1 土地利用

矢作川流域の土地利用別面積は、山林が約 76%、水田が約 10%、畑・荒地が約 10%、市街地が約 3%、水域が約 2%である。戦争中に供木として山林が切られたため、昭和 20 年代までは畑・荒地の面積が拡大していたが、その後スギやアカマツ等の人工林が植えられ、昭和 40 年代以降は荒地の面積は減少し山林の面積が増加した。また、水田面積は明治以降増加傾向にあったが、平成に入ると減少傾向に転じた。市街地は 2~3% と全体に占める割合は低いものの増加傾向にある。

表 3-1 矢作川流域土地利用の割合

	山林	水田	畑・荒地	市街地	水域	合計
明治	73.0%	7.7%	15.5%	2.2%	1.6%	100%
昭和 20 年代	68.2%	9.1%	18.3%	2.4%	2.0%	100%
昭和 40 年代	77.7%	11.4%	6.5%	2.7%	1.7%	100%
平成	75.7%	9.5%	9.5%	3.2%	2.1%	100%

1/50,000 地形図を基に面積集計して得られた数値

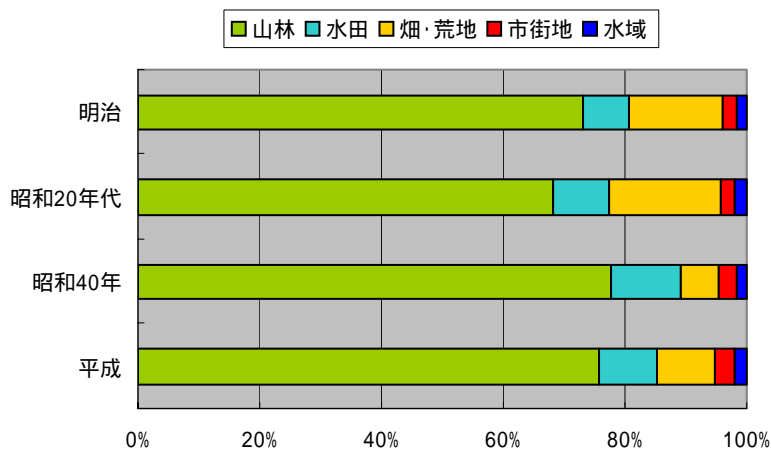


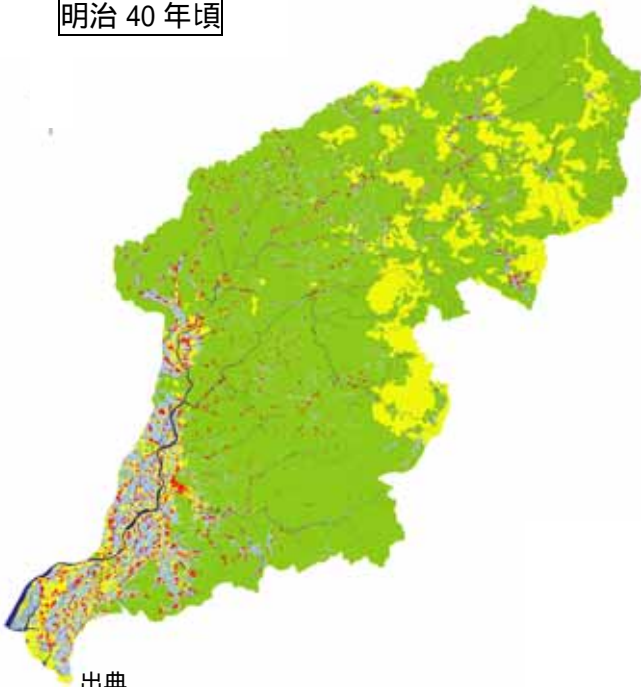
図 3-1 矢作川流域土地利用別面積割合

出典：明 治：上流域は M32、M44 年、中～下流域は T2～T12 年発行  
 昭和 20 年代：S25～35 年、一部 M22、T3 年発行  
 昭和 40 年代：S46～48 年、上流域は一部 S51 年発行  
 平 成：H7～15 年発行、上流域は一部 S62 年発行  
 1/50000 地形図をもとに作成

豊田市（旧保見村）  
 昭和 2 年頃はげ山の状況  
 写真提供：愛知県森林保全課



明治 40 年頃



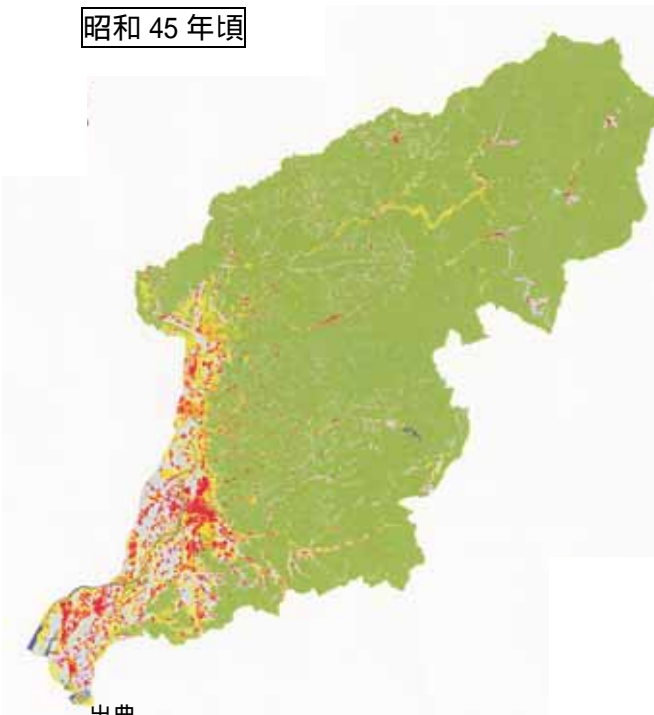
出典  
・ M23 年測図 ~ T9 年修正測図 1/50000  
地形図をもとに作成

昭和 25 年頃



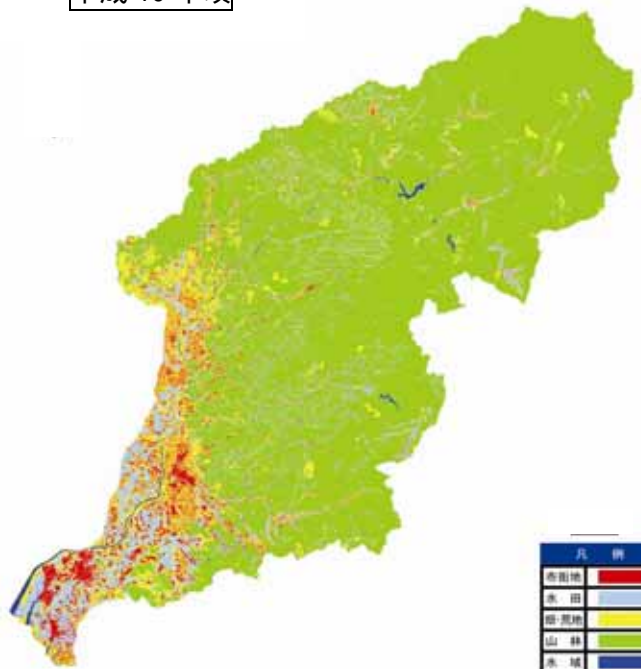
出典  
・ S24 年応急修正 ~ S26 年資料修正  
1/50000 地形図をもとに作成

昭和 45 年頃



出典  
・ S45 ~ S49 年編集及び資料修正  
1/50000 地形図 (S43 改測 ~ S48 測量  
1/25000 地形図をもとに修正) をもと  
に作成  
・ 一部上流域は S41 年改測及び S43 年補  
足調査 1/50000 地形図をもとに作成

平成 10 年頃



出典  
・ H6 ~ 13 年修正 1/50000 地形図 (H5 ~  
12 年修正測量 1/25000 地形図をもとに  
修正) をもとに作成  
・ 上流域は一部 S60 年修正 1/50000 地形  
図 (S59, 60 年修正 1/25000 地形図をも  
とに修正) を使用

凡 例	
市街地	赤
水田	黄
畑・果樹	緑
山林	青
水域	白

図 3-2 矢作川流域土地利用の変遷 (その 1)

### 3-2 人口

矢作川の流域は愛知県、岐阜県、長野県の7市5町4村に及び、流域関係市町村人口を合計すると約120万人（平成12年）となっている。なかでも、豊田市、岡崎市に人口が集中しており、両市を合計すると約68万人に達し、全体の半数以上を占めている。

5年毎の人口の推移を見てみると、流域全体では増加している。

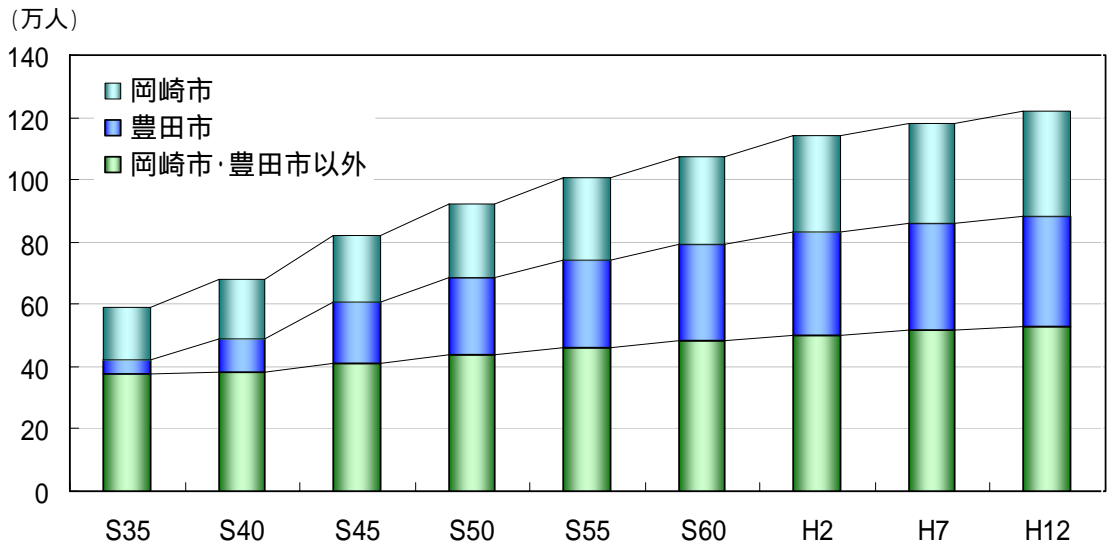


図 3-3 矢作川流域関係市町村人口の推移

### 3-3 産業・経済

矢作川の中・下流域は、自動車産業に代表される全国屈指の製造業地域である。

愛知県の工業出荷額は全国で第1位であるが、その半分以上を西三河地域が占めている。

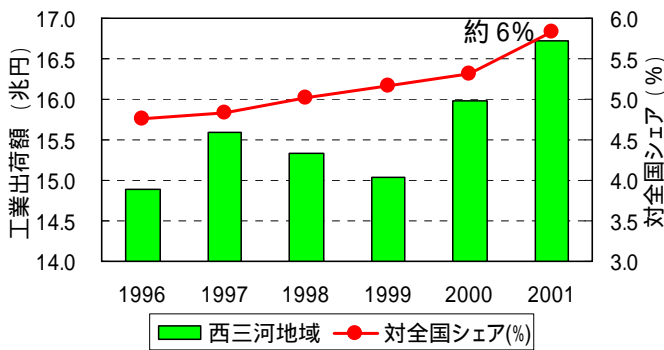
西三河地域の工業出荷額は、対全国シェアで見ると約6%となっており、さらに、年々増加傾向にある。中でも、自動車、機械製品の輸出、食料の輸入など、国際貿易の発展に伴い、碧南市の海岸部は衣浦臨海工業地帯として発展している。



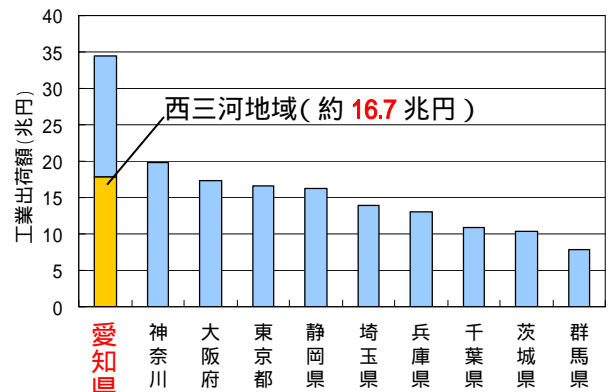
衣浦臨海工業地帯



工業出荷額の全国上位10位（平成13年）



出典：あいちの工業（愛知県）



出典：あいちの工業（愛知県）

図3-4 愛知県および西三河地方の工業出荷額と全国シェア（平成13年）

また、矢作川流域の中心部に位置する豊田市は、トヨタ自動車昭和 13 年に豊田市に生産工場を建設してから、自動車部品を生産する関連工場を含めた工業地帯として発展している。このため輸送用機械の出荷額は 12 兆円を超え、西三河地域の工業出荷額の 72.6% を占めている。全国平均の 15.8% と比べても割合は非常に高く、自動車産業が西三河地域に果たす役割は大きいといえる。

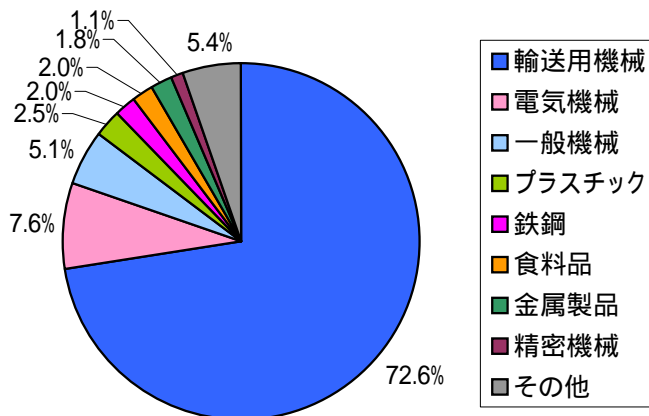


図 3-5 工業出荷額の構成比(西三河地域,平成 13 年)

製造業の工場が密集する豊田市  
写真提供：豊田市

一方、明治時代に明治用水、枝下用水が完成すると農地の開発が進み、昭和の初めには、安城市を中心とする一帯は「日本のデンマーク」と呼ばれるほどの優良農村となった。現在では流域の都市化などが進んだこともあり、耕地面積や農家数は減少傾向にあるが、集団営農による効率化や高付加価値製品の生産などの取り組みが行われている。

林業は、矢作川上流域の大部分が森林であることから、かつては盛んな地域であった。しかし現在では、林業従事者の高齢化や後継者不足等の影響が大きく、流域の市町村や県が中心になって林業を盛んにするための活動を行っている。



うなぎ養殖  
出典：一色町ホームページ

矢作川、矢作古川が注ぐ三河湾は、魚貝類の種類が豊富であり、漁業と養殖が盛んな地域である。クルマエビ漁やノリの養殖の水揚げ量は多い。また、河口付近に位置する一色町<sup>いっしき</sup>では、昭和 38 年に敷設した養鰻専用水道により、矢作川の表流水を水源としてウナギの養殖が行われており、日本有数の生産高を誇る。

### 3-4 交通

矢作川流域を通る東海道は、古くから江戸と京・大阪を結ぶ重要な街道であった。さらに、岡崎街道や飯田街道を始め、産業の発展とともに各地への街道も発達した。

江戸時代の始め、矢作川では舟運が盛んになり、土場と呼ばれる船着場等が栄えた。矢作川河口の平坂湊では、上流から運ばれた年貢米等が、平坂湊から江戸まで海路で運ばれた。一方、三河湾沿岸で生産された塩等は、平坂湊から岡崎を経て上流の古鼠で荷揚げされ、そこから馬で足助まで運ばれ、足助から信州へと輸送された。また、矢作川や巴川は木材等を運ぶ重要な通路でもあり、「筏流し」や木材を一本ずつ流す「川狩り」で上流からの木材等を運んだ。しかし、国鉄中央線の開通や、用水や発電所の完成等により、川船の航行が困難になり、矢作川の舟運は、昭和初期には役目を終えた。



図 3-6 流域の街道等  
出典：矢作川とその流域

現在、矢作川流域には、東海道本線や東海道新幹線、国道1号や東名高速道路などの基幹路線が横断し、東西を結んでいる。この他に、名鉄名古屋本線などの鉄道網が整備されている。さらに、現在、第二東名高速道路などの整備が行われており、広域アクセスの向上による流域の益々の発展が期待される。



図 3-7 交通網図  
36